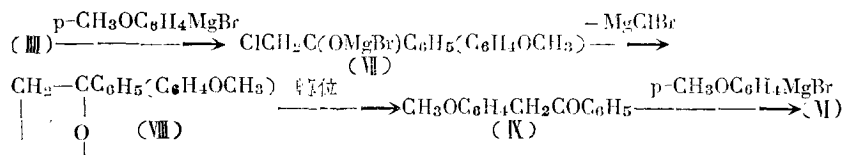
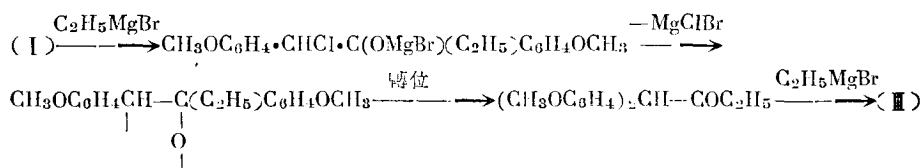


い様に思われる。o-クロルアセトフェノンを俚に採ると先づグリニャー化合物1-モルがケトン基に作用してクロルヒドリン型化合物(VII)が生成するが直ちにMgClBrを脱離する。そして(VIII)



は分子内轉位に依り結合を平均化して結局ケトン化合物(X)となつて一旦安定化する。茲で分子内轉位に當り、フェニル基とp-アニル基との孰れが移動するかが問題となる。併し例えばBachmannの混合ピナユールのピナコロン轉位に關する研究其他からしてもp-アニル基はフェニル基よりも轉位し易いものであるから、ケトン化合物としては(X)式のもの生成するであろうと推定される。之は勿論直ちに過剰に存在するグリニャー化合物と反應し、1,2-ジ-p-アニル-1-フェニル-1-エタノール(VI)となる譯である。

斯様な反應機構をクロルデスオキシアニソイン(I)のグリニャー反應に適用すると分子内轉位の起る理由を巧く説明することが出来る。



斯様にα-ハロゲン化ケトンのグリニャー反應では反應過程のうちにハロゲンヒドリンの脱ハロゲン化水素、或いはα-デオールの脱水に於けると酷似した分子内轉位の段階が常に包含されているのではないかと思われる。

尙上記2種の方法に依り製取される1,2-ジ-p-アニル-1-フェニルエチレンのエチレン水素を臭素置換すると既に強い發情作用のあることが知られている1,1-ジ-p-アニル-2-フェニル-2-ブロムエチレンの異性體が生成する筈である。本化合物の生理作用如何は藥物學的に興味深く感ぜられるので、該臭素化反應を試みたが、粘稠な油狀體が生成し、結晶化せしめることが出来ないので精製が困難であり、未だ生體試験は行つていない。

低温タールより内燃機用燃料の製造

(第4報)

舟阪 渡・横川 親雄

低温タールより内燃機用燃料を製造するに際して、先づ解決しなければならぬ事は酸性油の中性油化又は除去の問題である。この問題に對して、従來高肝水素添加分解法に依る中性油